鬼師の世界

── 白地：(株) 石英（2）──

高　　原　　隆

鬼板屋を訪れては、そして、また別の鬼板屋を訪れてはと繰り返しながら「鬼師の世界」をできる限り現場に忠実に、自らの経験をもとに記述を通して描いてきている。平成10年（1998）6月7日が実質的なフィールドワークの始まりなので、現在（平成26年）から振り返るとかなりの年月が経過している。今回はこれまで気づきながらも意図的に記述しなかった鬼師の世界を描いてみたい。鬼板屋には親方ないし社長と、職人ないし従業員がいる。しかし、職人のことを「鬼師の世界」に組み込むと大変な作業になるので、基本的には親方を中心にした鬼師の世界を構築してきた。この親方を中心においた鬼師の世界が核になることは明らかなのであるが、ここでは職人（身分が従業員）の世界に光を当てて別の角度から鬼師の世界を見てみたい。

(株)石英は現在手作りができる専門の鬼師を職人として二人抱えている。岩月光男、岩月実（みのる）の親子二代にわたる鬼瓦の手作り職人である。石英では手作り鬼瓦に関してはカネコ鬼瓦で修業を終えた四代目石川智昭の時代に入りつつあり、これに職人の岩月親子を加えると手作り鬼に関しては十分に需要に対処できる体制が整えられている。石英の手作り鬼は二代目石川英雄に始まる。この英雄が昭和の初め頃（1926年）、当時、神谷春義が親方をしていた鬼板屋の鬼源へ小僧として入ったことが現在の鬼板屋石英に至る直接の発端である。しかし、石英は三代目石川定次の時に手作り鬼瓦の伝統が一時途絶える。ところが定次の姉、頼代が鬼源直系の鬼板屋「鬼長」に嫁ぎ、さらに嫁ぎ先から三代目鬼長浅井邦彦の妹、歳子が定次のもとへ逆に嫁いでくることにより、鬼長と強い姻戚関係が発生する。このような伝統と人間関係の交わりの結果、石英は「鬼師の世界」における位置は鬼源系列に入ることになる。

岩月光男

現在、(株)石英で手作りの鬼板師として働いている岩月光男（83歳）は伝説の人であった。鬼師の世界を長く調べてきて、いろいろな鬼板屋で、いろいろな親方や職人から「凄腕の達人」として噂を耳にしながらなかなか会う機会が無かった人物である。理由は光男が職人であるからであった。実際に光男は過去、鬼仙、鬼作、鬼長と三つの鬼板屋を転々としている。正確には鬼仙、鬼作、鬼仙、鬼長、そして現在の働き口である石英と合計五つ鬼板屋を変えている。今回、石英を訪れた際にやっと会うことができた。どんな人かと工場の扉を開けたとき、現れたのは小柄な優しく静かなたたずまいの人であった。工場内は塵がなく、無駄がなく、きれいに整った空気に包まれていた。入った時、戸口に置いてあった板を踏んで、ガタンと大きな音を立て

て仕事場の雰囲気を壊したのは私の方であった。その時、光男と実は黙々と仕事に取り組んでいた。二人だけが仕事をする平屋の手作り鬼瓦工場であった。

岩月光男は昭和6年（1931）10月24日に高浜にあった鬼仙という鬼板屋に生まれている。この鬼仙に生を受けたことが光男が鬼板師になった直接の原因である。鬼仙は岩月仙太郎（1867–1943）が初代である。仙太郎は各地を渡り歩く鬼瓦職人で、いわゆる晩苦者（バンクモノ）として遠州を中心に働き、鬼板師の技術を身につけている。元々は高浜で魚の引き売りをしていたが、鬼板師の仕事に興味を持ち、三州では修業をせずに遠州へ出かけ旅職人をしながら鬼師としての技を鍛えたのである。この仙太郎を頼ってきたのが甥の神谷春義であり、後に高浜へ戻り「鬼源」を興した。春義より数年遅れて仙太郎は高浜に戻り、「鬼仙」を大正元年（1912）に興している。高浜での鬼板屋としての始まりは鬼源と鬼仙は古さが前後して鬼源の方が先になる。しかし、鬼瓦の流儀の流れにおいて鬼源は春義が仙太郎の弟子であることから岩月仙太郎系の中に入ることになる。（高原 2004–1、2）　光男はこのように高浜で最も由緒ある鬼板屋の一つに生まれたことになる。

光男の父は第二代鬼仙の岩月新太郎（1895–1943）である。新太郎は女6人男4人の子供をもうけている。光男は三男であった。ところが光男が小学校6年の時に父、新太郎が亡くなっている。三代目鬼仙を継いだのは長男の悦二（1922–1948）であった。ところが悦二は新太郎が亡くなって5年後の昭和23年（1948）にやはり病で亡くなっている。鬼仙は伝統の後継者が次々と亡くなり、存亡の危機に立たされる。悦二の後を継いだのが次男の孝一（昭和2年生まれ）であった。しかし、四代目鬼仙、孝一は四男の岩月清によると、昭和39年（1964）に鬼仙を破綻させ、家を出て行っている。（高原 2004–1）　あとに残ったのは三男の光男と四男の清であった。当然のことながら、これまでの鬼仙の流れから行くと、三男である光男が第五代鬼仙を継ぐはずであった。しかし清によると光男は「性格的に商売をするのが嫌い」と言って断り、「鬼瓦の修業をする」と言って叔父の杉浦作次郎が親方をする鬼作へ職人として出て行ったのである。この昭和39年事件が光男がこの年を境に職人人生を歩む発端となった重要な節目に当たる。本来なら五代目鬼仙として、親方として生きるその瞬間に本家の鬼仙を自ら出たのであった。光男は文字通りの職人といえる。

「凄腕の達人」と言われる岩月光男に会って聞きたかったことは、どのようにして鬼師としての技を身につけていったのかということであった。

> 親（岩月新太郎）はねえ、えーっと、僕が……自分が小学校6年生の時になくなっとるからねえ。親に習ったってゆうわけではない。それは（鬼師の技）……誰から習ったってゆうあれはない。家自体……先祖から鬼はやっとったもんだねえ。結局、習ったってわけじゃあないけど、見とって、ほいでやったってわけだね。

実際に鬼瓦を作り始めたのは昭和22、3年頃だという。光男が16、7歳頃である。鬼仙の工場にいたのは兄の孝一（20歳頃）と光男の二人であった。親方がいない兄弟二人の仕事場だった。兄の孝一は鬼を作るのが上手かったのかとたずねてみた。

> うーん。自分からいうとそんなに上手くない。

光男がそうした環境でどうやって技術を身につけていったのか不思議だった。それに答えるように光男は次のように話してくれた。

小さい時に、あ……まっと、あ……、小学校の小さい時の、あ、職人さんとかねえ、ええ、たくさんおった……いたもんだい。見とるわけで。全然、その、作ることはできないもんね。見とるだけで。……ぐらいのことだね。

実際に家の隣が鬼仙の工場で、小さい頃は工場に行っては遊んでいたという。また、「小学校の時でも粘土細工とか、あーゆうのが好きだったもんね」と言っている。さらに光男が鬼瓦を作り始めたのは16、7歳頃のこととはいえ、一方で光男は小さい頃の記憶をたどりながら次のように話すのであった。

まあ、小学校6年ぐらいの時にも（鬼瓦作りを）やっとったことがあるもんねえ。親（新太郎）が死んじゃって。お父さん……親が死んで、まあ、その日は、あの、石膏型は土を込むだけだもんだいね。そりゃあ、あの、親が死んじゃったもんだね。その日は、まんだ、せ、せ、戦争中だったで、まんだ、鬼がちいとずつ売れとったもんでね。それでも作るの……。まあ、職人さんたちはみんな、まあ、戦争中で「鬼はいらん」ってゆって、やめちゃって……、いなくなったもんだい。ああ……、よくやったよ。6年ぐらいからやっとるでねえ、小学校。うん、おらが、に、日曜日だとか、ああゆう時ぐらいはね。やっとるって言わない。こう、小(ち)っちゃいもんならやれるもんね。やり始めたってて、やっとったねえ。

確かに光男が言うように小さい頃から鬼仙という特殊な環境で鬼師の世界に育ったことはわかるが、戦争によって鬼仙から職人が離れていき、さらに鬼仙の親方である初代仙太郎（昭和15年）、二代目新太郎（昭和18年）、三代目悦二（昭和23年）と次々と亡くなっている。鬼師になる環境は年を追うごとに悪く、厳しくなっていった。それでも幸いなのは光男は昭和6年生まれなので、これら亡くなった親方であり身内とそれぞれ長い短いはあれ共に生きたことも事実である。そして鬼仙の親方が亡くなってしまった時に、光男は本格的に鬼師の世界へ入ったのである。

現在の光男が作る鬼瓦は鬼瓦作りにおいて全くの素人の私から見ても、光男の鬼瓦は他の鬼板屋で作られる鬼瓦とははっきりと異なっている。流派ないし流儀が違うといえる。つまり光男は鬼仙の流儀を明白に受け継いでいる。いったいどうして光男が親方のいない鬼仙で鬼仙の流儀を身につけたのかに対する光男の答えが光男本人から語られている。

鬼仙の技術はね、鬼作という人……親方……大将が、あの、鬼仙からの出だもんね。鬼仙の、あ、僕たちの叔母さんの旦那さんだもんね。鬼作とゆう人がね、そいだもんで、まあ、鬼作さんってゆう人はねえ。あの、まあ、若い頃はもと鬼仙で、まあ親類関係だったんで、鬼仙で鬼を作っとって、そいで、あの、瀬戸窯業ができた時に一期生で、瀬戸窯業行かして、そいで、瀬戸で、まあ、卒業して、また鬼仙に戻ってきて、そいで独立して鬼作。そいで僕がここ10年、そこでずーっと修業てや修業だけども、まあ、結局、職人として働いとった。

つまり光男は戦争が終わり、鬼仙が鬼瓦を作り始めた昭和22、3年頃から鬼仙でほぼ同時に鬼瓦を作り始め、四代目孝一が鬼仙を破綻させて出て行った昭和39年まで鬼仙にいた。しかし、孝一のあと、五代目鬼仙になることを断り、「鬼瓦の修業をする」と言い、叔父の杉浦作次郎の元へ身を寄せたのである。この作次郎が初代鬼作であり、光男の親方であった。鬼作に職人としていた期間は10年で、昭和39年から昭和49年までである。光男が33歳から43歳の間であり、光男が修業の時代と

呼ぶ期間である。この時に光男自身は鬼仙の流儀を会得したと考えている。光男は次のように答えている。

まあ……、結局、それは、まあ、仕事とか、食う、生活とか、もう必死になってやらんといかんでねえ。

ところが、鬼作で誰が一番腕があったのかと光男にたずねると、話しが濁るのである。

まあ、よう知らんけどねえ、鬼作さんとこの腕があったって人はねえ。まあ、うん、まあ、みんなおらんくてねえ。まあ、結局、息子さんとかが、その人も、鬼やっとったでね。僕、鬼作行っとった時でも、結局、ほの……石膏型というモノができて来て。わかっていると思うけど、石膏型じゃなくて、本当に手で作る、手作りでやるのが鬼だから。その時は、まあ、自分が任されとったからねえ。鬼作の時はね、その時は、まあ、……。今でもほとんど石膏型でやるもんね。こーゆうもんとか、あーゆうもんでもね。手作りってゆうもんがあると、その時は任されとったわね。

鬼作に石膏型を導入したのは親方の作次郎であった。作次郎が修業時代に鬼仙から瀬戸窯業に行った折に学んできた、当時、最新の技術で窯業から鬼瓦の製作技術への移転であった。作次郎は石膏型の技術を窯業の世界から鬼瓦の世界へ導入した一人といえる。（高原2005）　それ故、鬼作では石膏型が多用されていった。結果、手作り職人の光男から見て鬼作には腕のいい職人はいなかったことになる。では鬼仙の技術を伝授したのは親方の作次郎になるのかとたずねると、光男は次のように語りはじめた。

んー、別に、そんなー、10年やったって、そんなに、まあ、強く教えてもらったってあれではなかったからねえ。

つまり、作次郎から教えてもらった覚えがないと言っているのだ。実際に「覚えがない」と光男は言うのである。ではどうして覚えたのかというと「見て覚えていった」のであった。ところがその見て覚えていく時に、何を、誰を、見て覚えていったのであろうか。

まあ、誰をってゆうか……、まあ、作次郎さんってゆう人の作ったもんを見るぐらいのもんでね。やり方とかそういうことは教えてもらったことはないもんね。

光男は作次郎からは直接教えてもらうことはなく、作次郎が作ったものを見て、勘考しながら作っていったのである。この事を確認すると光男はうなずくのであった。

そう、そう、そう。まあね、みんなそうだったね。

「見て覚える」。これが職人が鬼板屋で技術を身につける基本的な手段であった。その木がよい木かどうかを見分けるには、その木がつける実をもって判断しろと言うが、光男をその木の実とすると、もとの木である作次郎は鬼仙からその流儀を忠実に受け継いでいた鬼板師であったといえる。鬼仙の流儀は岩月仙太郎から杉浦作次郎（もと鬼仙の職人）へ、そして杉浦作次郎から岩月光男（もと鬼作の職人）へ受け継がれていったのである。

光男は並の職人ではなかった。まず、本来、親方、それも高浜で最も由緒ある鬼板屋になるはずの人が、親方になることを自ら降りて、職人として生きる道を選んだ人である。さらにその地位を降りる動機が今日の光男を強力に後押ししている。

結局ねえ、あの、自分は、もう、あー、作る……、あれが（鬼瓦）好きだった。好きだったもんだい。ただ、自分は作った方がいいもんだい。（第1図参照）

さらに光男を鬼瓦を作る職人の道へ走らせたものがある。それは鬼仙の存続そのものに対する危機感である。ただ光男の意味する鬼仙は鬼板屋としての鬼仙というよりも、鬼仙が持つ鬼瓦作りの流儀であった。事実、鬼板屋の経営には光男は全く興味を示していない。

バタバタバタって逝(い)ったもんだい、まあ、「何とかしなくちゃいかん」と。それだけだったけんね。「ン、何とかして鬼仙を継いで行かにゃいけん」っていう……。

鬼作で10年職人として働いた光男は、昭和49年に鬼作を出て、再び鬼仙へ戻ってきている。その理由として鬼作が光男がいた10年の間に石膏型による型起こしのみならず、機械による金型でプレスによって鬼瓦の大量生産を始めたことを光男はあげている。

あの、機械、機械で、金型でプレスしてやるようになっちゃったわけ。大量生産になって。鬼作おった時、みんななってきたもん。まあ、「プレスや型起こしや、そんなんじゃつまらん」と思って……。迷っとった時、鬼仙、……また手作りとか、あーゆうのんがあるようになったもんで、こっちの技術を持って、そちらへ、……もどった。

もどってきた鬼仙では五代目鬼仙として、四男の岩月清が親方として経営していた。光男は鬼仙で手作りの職人として平成10年（1998）6月まで働いている。鬼仙では清の二人の息子に影響を与えている。兄の岩月秀之と弟の岩月貴である。秀之が鬼仙に入ったのは平成5年（1995）で、貴が鬼仙に入った年は、貴が18歳（平成元年）であった。二人は暫く窯の手伝いや配達をしながら、やがて鬼瓦を作り始めたのである。光男は平成10年6月に鬼仙を出ることになったが、その間兄弟は見よう見まねで鬼仙の流儀を光男から学んでいる。（高原2004–2）光男は鬼仙を再度出た理由を語ってはいない。しかし光男が鬼仙を出て同じ岩月

第1図　鬼面を製作中の岩月光男

仙太郎系列の鬼長に移ってほぼ一年後の平成11年9月6日に鬼仙は自己破産している。

光男は鬼仙から鬼長の本宅がある二池町の近くの仕事場に移った。現在は春日英紀が鬼英（おにひで）の看板を上げて鬼板屋をしている。しかし、光男が移った先の鬼長はやがて経営の中心を内部の事情とはいえ、鬼瓦から平板瓦の生産に移し始め、最終的には手作りの鬼瓦から撤退したのである。光男は鬼長が経営方針を転換した煽（あお）りを受けて、平成17年4月30日に鬼長を退社している。ただ鬼長は光男を無碍（むげ）に解雇したわけではなかった。鬼長はいろいろな意味でつながりを持つ石英へ話しを持って行って、光男を陰ながら面倒見ている。その結果、平成17年5月10日に光男は鬼長から石英へと移り、現在に至るのである。石英の現社長である石川定次はその時のいきさつを次のように語っている。（第2図参照）

「今月いっぱいで」とか……、とか……、言ってたもんですから、……社長（鬼長）が……。「ほいじゃ、うちがもらうわ」ってって……。

インタビューに同席していた定次の妻の歳子はもともと鬼長の出の人である。このあとすぐに話しを受けて次のように続けた。

あそこは（鬼長）……、鬼をやってたんですけど、……だんだん瓦（平板瓦）に力を入れてみえて、……でだんだんとね。うん、……手作りの人は……いらなく……。

歳子の話をすぐに継ぎながら、定次は光男を即決で受け入れたことを教えてくれた。

……で、……ちょっと……そういう話しが向こう（鬼長）からあったもんで、……「ほいじゃ……、うちが即もらいます」って、……。うん、……何のためらいもなく……。

このようにして、鬼仙に生まれて育ち、鬼板師となり、社会の表にはほとんど出ることのない職人ではあるが、その業界内では密かに名前が知れ渡っている人物が岩月光男である。平成25年11月14日、光男は82歳であった。その時に話してくれた鬼瓦作りに関する光男の話を記録としてここに紹介する。

高原：天性のものがあるのではと思うんで

第2図　無量寿寺本殿大棟足のミニチュア版を製作中の岩月光男

すけど。

光男：うーん……。数作ればできるじゃないかねえ。

高原：いいものを見るように努力したとか、そういったことはないですか。

光男：ないねえ。

高原：鬼瓦を作るとはどういうことですか。

光男：ん……、わからん。……、簡単にいやあ、生活のためだけに……。

高原：なんか、こう、ある思いを込めて作るとか、そんなんはないですか。

光男：ないねえ。あんまりそういう気持ちはないねえ。

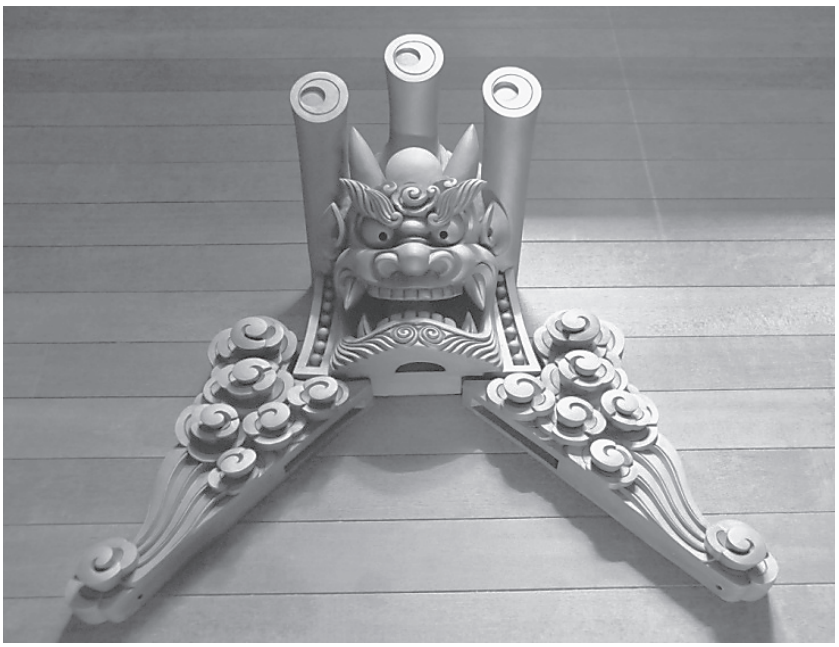
高原：作るのはおもしろいですか。

光男：おもしろくない。なかなか思うようにできない。

うーん。結局ねえ、これ、焼きもんだもんね、作る技術だけじゃあ、だめだと思うんですけどねえ。まあ、あの、最終的には、あの、窯だもんね。焼き上げだもんね。……焼き物はねえ。焼き物はねえ、だいたい一番、焼き物は土、技術、窯焼きね。ほいだでね、焼きが一番大事だでねえ。いくらきれいにでかしとったってねえ、こんなとこなんか傷ができとる。土が悪いともう傷も出るし。あのね、技術はね、一番あと。焼きもんはそう。特にあーゆう茶碗とか、あーゆうのが、焼きもんでも、えがんだり、傷が出ても、色がよけりゃあ、「いい」ってゆう、……なっとるけん。これも実際の使う屋根載せて、傷が出たため長く持たん。

一番あれは、あの、窯で焼くのは一番難しい。技術はあと。

粘土もいかんけんね。粘土も大事ね。実際に自分でも、でかしても、最後に傷が出る時がある。乾いてくる時にねえ。空気だけど。急に冷えたりなんかすると、ピシーッと切れちゃう。一晩でね。うん、だから難しい。だいたい土の多いとこと少ないとこがあるもんねえ。どうしても引っ張られちゃう。（第３図参照）



第３図　無量寿寺本殿大棟本鬼面のミニチュア（1尺）
岩月光男作　平成26

岩月実

岩月光男にはすでに後継者がいる。光男の息子の実（みのる）である。昭和44年3月6日に高浜で生まれている。小さい頃から父、光男の仕事のことははっきり知っており、土にも触ったこともあるという。しかし、実が子供ないし少年時代を過ごした頃は光男が鬼作（昭和39年〜昭和49年）そして鬼仙（昭和49年〜平成10年）で、職人として働いていた。もし光男が昭和39年に鬼作へ行かずに五代目鬼仙として親方になっていれば、実の環境はかなり変わったと思うが、光男が職人だったことで、実は土に親しみながらも、鬼師の道へそのまま進むことはなかった。

> バブルの頃なんで、あの……25年前。専門学校行って。あの頃、花形でねえ。就職もすごい楽にできて、大卒でなくても、やっぱりそういう専門学校入っとれば、そういう……まあ、ところへ入れるんで。資格とかあれば。

社会に出て、実は富士通のディーラーのSE（Systems Engineer）をしていた。ところが現実は実が思っていた世界ではなかったのである。「入ったんですけど、まあ、あんまりおもしろくない」と言っている。結果、実はその仕事をやめて改めて鬼師の世界へ入ったのである。平成7年（1995）、実が26歳の出来事であった。その時の動機について実は少し話してくれた。

> まあ、親父がやっとるもんでって……、感じですかねえ。まあ、あと、作ったもんが残るんで。……ってゆう感じで作ってみたいなあと思って。

父、光男からは特に何かの声かけはなく、あくまで実本人の決断であった。しかし、SEから鬼師への切り替えは人生の大きな出来事である。それはいかに光男の後ろ姿の影響が強かったかを物語っている。誰にでもできる切り替えではないからである。

実が鬼師の世界の扉を叩いたのは26歳の時であった。父、光男が16歳で鬼瓦を始めたのと比べると年齢的には鬼師を始めるにはやや遅いといえよう。年齢に関しては大きなハンディキャップを負っているといえるが、実は他の多くの鬼瓦の初心者とは異なる遙かに有利な条件を持っていた。「凄腕の達人」と同じ業種の人たちの間で密かに噂される鬼師である光男に直接ついて修業できたことである。その上、実は光男とは赤の他人ではなく、光男本人の実子なのである。通常は、鬼師に鬼板屋の子供以外の者がなろうとする場合は、本人が直接腕のいい鬼師を選ぶことはできず、単に鬼板屋を選ばざるをえない。それさえも希望通り行くかどうかわからない。たとえ入れたとしても、すぐには本来の仕事をさせてもらえず、しばらくの間は雑用に回される可能性がある。ところが実の場合は光男が鬼仙にその当時いたこともあって、すぐに光男のもとで修業を始めることができたのであった。

> まあ、僕（実）は、あの、最初は、まあ、誰もですけどできないんで。まあ、簡単なもんをちょっと作るぐらいですね。できないんで、最初は。簡単な仕事を分けてもらって、お、鬼仙におる時はそれを（光男の）後ろでやっとったぐらいですね。

つまり、実は光男と同じ仕事場で光男の後ろに陣取り、二人で仕事を始めたのである。光男は自分の仕事をやりながら、実には実ができる仕事を渡し、実の実力の伸びと仕事の進捗状況を見ながら適切な仕事をその都度与えていたのである。

では実は素人の状態からどういうふうに鬼師になっていったのであろうか。光男の場合

は作次郎という親方はいたが、ほぼ独学で鬼瓦の修業をしている。実の場合、目の前に最高の鬼瓦の職人がいて、しかもその人は自分の父親なのである。

「どういうふうに習う」っていうふうに聞かれても……。習った覚えがないですからね。もう見るだけなんで。できとるのを見て、まねして作るぐらい。（光男が）作っとるとこも見るんですけど、見とってもできん。できん。やれないじゃないですか。やっぱり素人なんで。だもんで、できたやつを見て、見よう見まねでやるしかない。

光男からの教えはほとんどないのである。もっぱら自らが勘考しながら作っていくのである。

できんもんで、でき……、あれですねえ、できんもんはできんもんで……。うん、上手いことできんもんで、できるようにやるしかない。（笑い）どう説明……どう説明していいのか、ちょっとわからんけどね。そうですねえ、まあ、知らんどる……知らんどる間に、まあ、できるようになるって言うか……。

実にいつ頃からやれるようになったのか、またそういった感覚がいつ生まれたのかと聞いてみた。

あれはねえ、わからんですねえ。いつも毎日、だってねえ、こういう仕事をやっとるもんで。いつ頃からって聞かれても知らんどる間にできる……、できるようになった。それも、うーん……、どうなのかな。よく見学に来る人とかにねえ、観光バスが時々来るんですよ。なんか、工務店の人が連れてきたり、屋根、屋根屋さんと一緒に来るんですけど……。で、聞かれるんですけど、うん、そんな、答えられんもんねえ。「いつ頃できるようになった」とか、「何年かかった」とか言われても、……知らんどる間にできるようになっとるでえ……。何日も同じ事やっとりゃ。（光男からの指示は）ないよねえ。だって、あの、図面とか来たらその通りに作りゃいいんで。「こうした方がいい」とかあんまり……。（第４図参照）「こんな感じかなあ」ぐらいは聞くぐらいで。

第４図　沢渡町石英の手作り鬼瓦工場にて：岩月実（中央）と岩月光男（右手奥）

そうですねえ、作り方が有ってないようなもんなんで。こういう手作りもんは毎回違うもんを作るもんで、だもんで、ど、どうゆうふうにとかは考えんで、まあ、その、行き、……行き当たりばったりで作るもんで。だもんで、いろんなもん作っとるもんで、「追加で、3年ぐらい前に作ったやつを作ってくれ」って言われても、もう覚えてないんで……。どうやって作ったかも忘れちゃっとるし、こんな時期、仕事はこういう仕事なんですけど、作ってるもんが全然違うもんで。うん、できるんですけど、毎回作るもんが違うもんで。

本人も気づかないうちに、毎日ただ作り続けているうちに、いつの間にかできるようになっていることが実の話から見えてくる。しかもいつもいつも同じものを作るわけではないので、逆に「毎回作るものが違うもんで」なかなかはっきりといつできるようになったかわかりづらいといえる。作る技術はその都度の勘考になり、その積み重ねから生まれる総合的な技術ともいえる。しかも毎回違うということは技術に終わりはないことになる。そういった中で何が作る時に一番大切なものなのかと実にたずねてみた。

乾燥。やはり、あの、乾燥ですね。作るのは作れるんですよ。で、作ってから窯に入れるまでに切れちゃったら、もうそこで切れたままですね。で、窯から出しても切れてるんで。で、結局は、あの、納期とか有るんで、それを直して出したりしないといかんもんで、結局またきれいには直すんですけど、見てもわからん程度に。ん……、直すんですけど、だけど結局、切れちゃっとるもんで作る人間からしてみると、「あっ、駄目じゃん」って。だったらゆっくり乾燥さして……、だもん、乾燥は一番。

さて、ここからは流儀とその伝達の仕組みについての考察である。光男や実が作る鬼瓦を見ていると素人の目にもわかるほどの独特な鋭さを伴う美しさといったような特徴がある。特に他の鬼板屋でできた鬼瓦と光男たちのものを二つ比べてみた時にはっきりと違いが出てくる。鬼仙が持つ鬼の流儀が違いとして浮かび上がる。実（みのる）は鬼仙の特徴、すなわち流儀について次のように話す。

説明が難しいねえ……。口では言えんね。見りゃたぶんわかるんですけど。何が違うって言ったら、……ま、簡単に言うとね、たぶんね、すごい大きいもんと、小さい……たとえば、ああゆうもん。……これは京都御所の小っちゃいミニチュア（鬼瓦）。でも、作りは一緒だと思います。で、よそのやつは、大きいやつは大きいなりに雑で、小っちゃいやつは小っちゃいやつで作りぬくいもんで、またちょっと、こう篦（へら）が入らんところはごまかしたりとかしとるかなってゆう感じで。で、親父（光男）が作ったやつは大きいやつも小っちゃいやつもたぶん一緒。

つまり光男は大きさの大小にかかわらず、緻密に作り、手を抜くことは一切しないのである。

雑とかじゃなく、バランスがいい。大きいやつも、小さいやつも。バランスがいいと思う。むずかしいねえ。ものを置いてもらうとすぐわかるんですけど……。目ではすぐわかるんですけど、言葉で言うと難しいね。たぶん、大きいもんでも、小さいもんでも一緒。他の人が作ると全然違うと思うよ。作り方は一緒だと思うんだけどね。作っているとこは見たことがないもんで、他の鬼屋さんの……。比べるとわかると思う。大きくなればなおさらわかると思う。

もう一方の、流儀の伝達の仕方ないしは、

その仕組みについてはいわゆる「見て覚える」または「見て盗む」といろいろな鬼板屋でこれまでしばしば耳にしてきた言葉である。「見て覚える」と聞いて職人本人は実際に現場にいつもいるので、特に問題はないと思われる。職人自身は「そうだ」とうなずくだろう。ところが部外者は「見て覚える」はわかったようでよくわからない世界になる。実(みのる)はその言葉の中身について私にわかりやすく語ってくれた。それ故、いかにそれぞれの鬼板屋の独特な流儀が世代から世代へと伝わっていくのかがよくわかる。

ただ作っとるもんを、いいもん見とるもんで。まあ、その違いだけだと思うんすけどねえ……。だいたいの、こう、作り方ってゆうか、細かい磨き方とかは別として、だいたいの作り方は、だいたいねえ、見とりゃねえ、覚わるしねえ。他の人はどうやって作っとるか知らんけど、自分は親父のやつを見て……。「あっ、これはこいやって作るんだ」っちゅうふうに、ほぼ覚えたぐらいで。でも、他の人の……、他の鬼屋さんの作り方は全く知らんもんねえ。ど、どうやって作っとるのかも見たことないもんね。作った製品は見たことあるけど……。うん、作り方は見たことない。

実が語っているように「見て覚える」とは、同じ鬼板屋で、繰り返し見ることによって、作り方の技法が見る人の意識に写真のように刷り込まれていくことを指しているように思われる。そして、何を見たかが、流儀を決定していき、次の世代へと伝わっていくのである。ちなみに実の場合は光男と同じ仕事場で台を並べて約20年間、光男が作る**鬼瓦を見続けてきた**ことになる。そして実際に自ら鬼瓦を日々作り続けることによって、身体知に転化して生きた伝統となるのである。(第5図参照)

実はさらに鬼瓦を製作する時の身体知の動く様をリアルに伝えてくれている。鬼亮こと梶川亮治が言う「空間のデッサン」に似ているのに少なからず驚かされるのも事実である。(高原 2003)

もともとはねえ、小学校の時から図工とか好きだったもんで。自分は。絵とかもねえ、描(か)けんとちょっと（鬼は）できんかなあと

第５図　岩月光男（左）と岩月実（右）

思うけどね。絵、絵が描けんとちょっとできんかもしれんね。絵を描いとるじゃない。絵を描いとるような感覚で作っとるようなイメージだなあ。じゃなきゃ、多分できんと思うね。こう、真似て作るだもんで、たとえば漫画があるじゃないですか。「ドラえもん」とか。ドラえもん……この漫画をこう写すんじゃなくって、見ながらこうやって描(か)く、粘土で。自分の手で、絵を描くような感じで作ってる。僕らでも、こうゆうの（ひな形）がなかったら作れんもんねえ。こんなん、はっきり言って、絵とこうゆうものがあれば作れるけど。ん……、「作れ」って言われたら作れんもんで。平面で来ると難しいけど作る。だけど、こうゆうもん（ひな形とか実物）が来りゃあ、もう、もっと楽で、もう、作れるねえ。（第6図参照）

まとめ

初代鬼仙の岩月仙太郎直系に当たる職人、岩月光男と岩月実親子について彼らが持つ鬼瓦の世界を考察してきた。鬼仙の鬼瓦作りの流儀を今に伝える「生きた仙太郎」とも言える職人である。残念ながら鬼仙そのものは鬼板屋としては現在存在していない。また同じグループの鬼作も存在していない。結果、岩月仙太郎系の鬼板屋はその数が少なくなっているのは事実である。その中で今も鬼仙の流儀を伝えているのが、独立した鬼板屋を持たない、親方ではない、職人の岩月光男と実なのである。鬼板屋は本来手作りの鬼瓦を作るのが仕事であった。その事によって各鬼板屋の鬼作りの流儀が親方並びに職人によって世代を超えながら伝えられていた。ところが岩月仙太郎系に関して言うと、鬼作によって始まった石膏型の技術の鬼瓦への導入、さらには金型を使ったプレス機械による鬼瓦生産方式の導入によって鬼瓦の大量生産が行われるようになったのである。これは鬼作に限らず他の鬼板屋にも波及していった。本家の鬼仙、そして鬼長もその例外ではなかった。大量生産が始まると、鬼板屋の技術の核心に当たる手作りの伝統が徐々に蝕(むしば)まれ、やがて駆逐されていく。手作りで鬼を作る必要がなくなるからである。一方、鬼板屋では当然のことながら世代交代が必ず起きる。伝統の継承と世代交代は密接に関連している。伝統の継承が十分に成されない次の世代が現れた時、鬼板

第６図　鴟尾を製作中の岩月実

屋の存続はきわめて危険な状態になっていく。鬼仙の場合は短期間に続けて世代が三代交代する状況に陥り、伝統の継承が不可能になり危機的な状況になった例である。そうした場合、手作りのできる職人に頼るか、プレス機械に頼るかという岐路に鬼板屋は立たされる。後者を選択すると鬼板屋は継続できてもその鬼板屋が本来持つ鬼作りの流儀は消えてしまう。フィールドワークを長期にわたって続けてきたことによって見えてきた事実である。

岩月光男と実は鬼仙の系図からいうと五代目鬼仙、六代目鬼仙に本来なるはずの人である。しかし、事情により自ら職人の道を選んで今日に至っている。鬼仙は五代目を継ぐ時、不幸にも経営と技術の分離が親方に起こり、後に鬼板屋としての鬼仙は経営に失敗して消滅したのである。しかし、一方の分離していった鬼仙の技術はしっかりと岩月光男と実に継承され、「隠れた鬼仙」として今も存続しているのである。(第7図参照)

参考文献

高原隆　2003年　「鬼師の世界―黒地：山本吉兵衛(2)―」『文明21』第11号：81–132
―――　2004年　「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(1)―」『文明21』第12号：113–165
―――　2004年　「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(2)―」『文明21』第13号：155–175
―――　2005年　「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎系(3)―」『文明21』第14号：97–111

第7図　無量寿寺奥の院唐門本棟鬼瓦、釈迦如来、普賢菩薩、文殊菩薩座像1尺2寸　平成18年　岩月実作